ラジオ放送

＜令和4年10月～12月放送分＞

ON AIR

金光教の声

No.441

もくじ ～*contents*

＜小川洋子の「私のひきだし」２＞

☞ 作家・小川洋子さんによる心温まるエッセイ

●運命を愛し運命を生かす　*page 1*

●祖母の掌（てのひら）　*page 5*

●許すということ　*page 9*

●スランプについて　*page 13*

●神と人との関係　*page 17*

＜先生＆信者さんのおはなし＞

☞ 金光教の先生や信者さんのお話です。

●くされひざ（信心ライブ）　*page 21*

●ガラス食器を扱うように　*page 25*

●神様の物差し　*page 30*

●こじらせ都に愛のハグ　*page 35*

●心配を祈りに変えて（信心ライブ）　*page 40*

●人を思いやる心　*page 44*

●祈る気にさえなれなくても　*page 49*

●おまかせ、おまかせ、神様におまかせ　*page 54*

《小川洋子の「私のひきだし」》

「運命を愛し運命を生かす」

皆さま、おはようございます。作家の小川洋子です。昨年に引き続き、「小川洋子の『私のひきだし』その2」と題しまして、日頃私が金光教をとおして思っていることを、5回に渡り、自由におしゃべりできたら、と考えています。今日はその第1回です。どうぞよろしくお願いいたします。

私は父方の祖父が岡山市にあります、金光教岡東教会の教会長をしておりました関係で、子どもの頃から自然と、宗教的な雰囲気に守られて育ちました。教会の離れに住んでいましたので、教会が遊び場でした。本人が全く意識しないうちに、家族や信者さんから金光教的な考え方を、頭ではなく心で感じ取りながら成長した、と言えるでしょう。

さて、私は文学を勉強するため、１９８０年、東京の早稲田大学に入学しました。大学時代の4年間お世話になったのが、今も小金井市にあります、金光教の信奉者のための、金光教東京学生寮です。当時、男子寮には30人ほど、女子寮には5人が入寮していました。18歳の私は生まれて初めて、ここで親元から離れた生活を経験することになったわけです。

出身地も大学も家庭環境も異なる者たちが、一つ屋根の下で一緒に暮らすわけですから、面倒な問題がいろいろ起こって当然です。ところが、人間関係のトラブルに悩まされることは一

切ありませんでした。私たちは何でも分け合いました。食べ物や洋服や本などといったものだけではありません。最も強い絆で共有したのは時間でした。誰かが悩みを抱えている時、孤独な気持ちでいる時、喜びを伝えたいと思っている時、私たちは相手にいくらでも自分の時間を差し出し、一つの時間を共有し、心を通わせ合ったのです。

初めての合コンに何を着ていったらいいか、名画座で観た映画がどんなに素晴らしかったか、好きな人に振られてどれほど傷ついているか…。今から考えれば、他愛もない内容だったかもしれません。しかし、貧しい私たちが持っている最も貴重なもの、それが時間であり、それを分け合うことが何より相手への思いやりを示す方法だったのです。

私たち5人が同じ価値観で生活を共にできた一番の要因はやはり、バックボーンに金光教の教えを持っていたからでしょう。私は金光教のおかげで、一生の友人と出会うことができました。

そしてもう一つ、生涯をとおして決して忘れることのできない出会いがありました。寮監の中山亀太郎先生です。先生は5歳の頃、買ってもらったばかりの下駄が線路に挟まり、それを取ろうとして汽車にひかれ、両手と片脚を失われました。しかし、お母様の愛と金光教の信心を支えにして、困難の中、運命を切り開いてこられました。学生寮でお世話になった時はもう既に70代の半ばでいらっしゃいましたが、日常

生活には何のご不自由もない様子でした。いつも着物姿で、ミシンも使えば自転車にもお乗りになる、という具合で、おそばにいるとつい、お体のことなど忘れてしまうくらいでした。

先生は寮生たちに余計なことは何もおっしゃいませんでした。小言をこぼされたり、不機嫌な様子を見せられたり、雷を落としたり、といったことが一切、一度もなかったのです。先生はただそこにいるだけで、私たち学生に人生の重みを伝えてくださいました。言葉など必要ないのです。先生が背負ってこられた過酷な運命の前で、言葉が何の役に立つでしょうか。無言の中にこそ、言葉にできない真実を感じ取ることができたのです。

先生とお食事をご一緒する機会が何度かございました。先生は片脚と、腕の付け根と、あごを使い、誰の助けも借りずにお食事をなさいました。そのお姿には、どこにも不自然なところがありません。澄んだ風が吹いてきた時、自然に顔を空に向け、目を細め、深く息を吸い込みたくなるのと全く同じように、仕草の全てがありのままで、美しいのです。

先生に「運命を愛し運命を生かす」という題名の著書があります。これほどの運命を背負いながら、それを恨むのではなく、愛し、自らのものとし、それを生かして新しい運命を開拓してゆく。小さな体で、黙々とお食事をされる先生のお姿を前にし、人間はこんなにも自然に自分の運命を受け入れる強さがあるのかと、ただ胸がいっぱいになるばかりでした。

言葉で組み立てられた理屈ではなく、浄化された苦しみが美しい結晶となったような無言の中で、先生と向き合うことができた経験は、私の中で今でも、貴重な宝物となっております。

本日はここまでです。どうもありがとうございました。それではまた来週、よろしくお願いいたします。

《小川洋子の「私のひきだし」》

「祖母の掌（てのひら）」

皆さん、おはようございます。作家の小川洋子です。『私のひきだし　その２』。本日は第２回です。

前回は大学時代の学生寮での出会いについてお話ししましたが、今回は時間を少しさかのぼって、子どもの頃の、祖母の思い出を語ってみたいと思います。

今、よみがえってくるのは、小さな体で、背中を丸め、両手を合わせてただひたすら神様に祈っている姿です。あるいは、感謝している、と言ったほうがいいのかもしれません。どちらにしても、祖母にとっては同じことでしょう。祈りは感謝であり、感謝が祈りであったのだ、と思います。

金光教の教会では春と秋の年２回、大きなお祭りがあります。その時、お祭りのあと、お参りにこられた信者さんたちに持って帰っていただく祭り寿司と、豆じゃを作るのが習わしでした。「豆じゃ」というのはどうも祖父母の教会独自の料理だったらしいのですが、餅米とうるち米を配合し、大豆を混ぜて炊くご飯です。小豆ではないので、赤飯とは違います。味付けは塩とお酒だけで、ご飯は薄い上品な大豆色になります。それを容器に詰め、片隅に奈良漬けを二切れのせるのを、よく手伝いました。奈良漬けの濃い茶色が染みた部分の豆じゃがまた一段とおいしく、私の大好物でした。

さて、お祭りの日は早朝から信者さんや家族が総出で、この豆じゃとお寿司を作ります。お米を炊く人、かんぴょうやしいたけを煮る人、魚をさばく人、酢飯を作る人、洗い物をする人…。教会専用の広い台所は大騒ぎです。この陣頭指揮を執るのが、祖母です。腰が曲がり、体はいよいよ縮まり、子どもの私から見てもほとんど妖精のように小さかった祖母が、料理に関する全てを把握し、あらゆる作業が滞りなく予定の時間内におさまるよう、差配していたのです。

しかし、祖母は目立つことの苦手な、口数の少ない人でしたから、決して大きな声で命令する、という雰囲気ではありませんでした。黙々と、信者さんたちの間をすり抜けるようにしてあちこち移動しているうち、いつの間にか全てがうまくおさまっている。そんな感じでした。

がやがやした台所の活気と豆じゃの香り。それは私にとって、教会の生活の幸せを象徴する記憶です。その中心にいたのが、祖母なのです。

私や弟が急に熱を出したりすると、母は病院に連絡するよりも前にまず、同じ敷地内にある教会へ走り、祖母を呼んでくるのが常でした。布団に寝かされ、苦しんでいると、中庭に面したガラス窓に、両手を合わせてこちらに向かって来る祖母の姿が映ります。腰の曲がったその小さなシルエットが目に入るだけで、「ああ、おばあちゃんが来てくれた」と、母も安堵の声をもらします。まるで、おばあちゃんさえいてくれれば、あとは何の心配もない、とでもいう

かのようでした。

「あらまあ、かわいそうになあ」

祖母は息を弾ませながら枕元に座り、「金光様、金光様……」と言って背中をさすってくれます。祈りのこもった、祖母の掌（てのひら）の感触が、私の体をすうっと楽にしてくれます。あれは本当に不思議な、理屈では説明のつかない体験でした。病気の私を救ってくれたのは、どんな薬でも名医でもなく、すぐそばにいて、私のために神様に祈ってくれる、祖母の存在だったのです。

祖母は別に、手をかざすだけで病気を治すような、特殊な能力を持っていたわけではありません。祖父を助け、教会を切り盛りしながら、7人の子どもを育て、数えきれないほどの孫やひ孫に恵まれて生きる、ごく平凡なおばあちゃんです。ただ、彼女には揺るぎない信仰がありました。世の中の全てに対し、感謝の念を捧げることのできる信心でした。だからこそ、病気の私を前にしても、おろおろしたり、焦ったりといったマイナスの感情は一切見せず、全てを神様に委ねる大らかな心でいることができたのでしょう。その心は子どもの私にも十分伝わりました。

私が成人式を迎えた日、認知症の進んでいた祖母は、もはや私が誰か、分かっていませんでした。振袖（ふりそで）姿の私を見ると、涙を流し、「奇麗なお方が来てくださった」と言って、私に向かって両手を合わせてくれました。その手はいっそう小さく皺（しわ）だらけになっていましたが、祈り

の姿は変わらず、神様と向き合う喜びにあふれているようでした。

亡くなってからも祖母はきっと、多くの人々のために祈ってくれているでしょう。苦しむ人々の背中をさすっているでしょう。今でも私の背中にはあの掌の感触がありありと残っています。

《小川洋子の「私のひきだし》

「許すということ」

皆さま、おはようございます。作家の小川洋子です。『私のひきだし　その2』、本日は第3回です。1回、2回と、金光教に関わる、学生時代と子ども時代の思い出を語りましたが、今日は視点を変えて、世の中の仕事、職業について少し考えてみたいと思います。

以前、女性誌のエッセイに、ホテルの朝食のルームサービスを運んでくれる女性について書いたことがあります。こちらはまだお化粧もせず、ほとんど寝間着姿だというのに、ホテルの女性はすでに完璧に身だしなみを整え、背筋をピンとのばし、笑顔を浮かべて朝食を運んでくれます。早朝からこうして働いている人がいる。てきぱきとプロの仕事ぶりを見せてくれる。そういう、働く人の美しさに心動かされた体験を描いたエッセイでした。

しばらくして、また別のホテルに宿泊し、ルームサービスを頼んだ時のことです。運んでくれた女性が、部屋を去り際、遠慮気味に言いました。

「私たちの仕事に目を留めてくださって、どうもありがとうございます」

女性は涙ぐみ、それからまたプロの笑顔を取り戻して、部屋を出て行きました。ほんの一瞬の出来事でした。

やはり、自分の見方は間違っていなかったのだ、と思いました。自分の仕事に誇りを持ち、

地道に訓練を積み、とにかく一生懸命働いている人は、その職業が何であれ、尊敬されるべきなのです。ホテルマンたちへの気持ちが、エッセイをとおして一人の女性に伝わり、何かしらの励みになってくれたのだとしたら、これほどうれしいことはありません。

考えてみれば私は、小説を書く以外のほとんど全ての仕事をすることができません。ショベルカーを操作して土を掘り返したり、ケーキを焼いたり、テニスでセレナ・ウィリアムズを負かしたり、何もかもできないことだらけです。世の中は、自分にできないことをやってくれる誰かのおかげで成り立っているのです。

そう思えば、他人のミスも大目に見ることができる気がします。頭を下げてひたすら謝っている店員さんを前に、大きな声で文句を言っているお客さんを時折見かけますが、何があったにせよ、まずは許すところから始めたほうが、本人も気分がいいのではないでしょうか。怒る、という感情には、相当のエネルギーを使います。たとえ、相手が100％悪かったとしても、そのミスをなじるばかりでは、ただ疲れるだけです。

そんな時、ふっと心を鎮め、「この人には私に分からない苦労があるんだ。誰もミスがしたくてする人はいない。きっと何か事情があったに違いない。なのに、事情を説明する間も与えずに怒り散らしている自分のほうが恥ずかしくないか？」。そんなふうに思える心の余裕があれば、事はたいてい丸くおさまります。

しかしそう上手くはいかないのが世の常で

す。例えば私は芥川賞の選考委員をしているのですが、いいと思った作品の良さを説明するよりも、つまらないと思った作品の欠点を挙げるほうがずっと簡単です。「ここが良くない。ここも駄目」と言っているうちに、だんだん気分が高揚してくるのです。けれど文学賞の選考では、どの作品を落とすかではなく、「どの作品を受賞させるか」に主眼を置かなければ、充実した選考会にはなりません。一見、欠点のようであっても、それを非難する前に、許せる欠点であるかどうか、という視点でとらえるのです。

どのような作品であっても、それはやはり誰かが一字一字、時間をかけ、刻み付けるようにして記した小説です。同じ作家ならば、その労力がどれほどのものか、分からないはずはありません。この小説は、この人にしか書けないもの。自分には書けない小説。そう思えば、選考会に臨む態度も、おのずと定まってきます。

ですから、先に述べた、誰かに怒りをぶつけるような場面でも、非難ではなく、許しの気持ちを持つことができたら、どんなに楽でしょうか。相手は、自分にできない仕事をしている人である。そう思うだけで、尊敬の念を抱くことができます。相手に対して想像力を巡らせれば、あらゆる人々が、結局は一生懸命に生きているのだ、という実にシンプルな真理に行き着くことができます。

信仰心は、人間に対する、この想像力を育んでくれます。社会的な地位や、見た目や、学歴、などといった外側の余計な飾りを取り払い、目

の前にいる人の本質を感じ取ることが、信心の稽古になります。人々は皆、神様によって愛おしく思われているのですから、当然、許すことができるはずなのです。

本日は以上です。では、また来週、よろしくお願いいたします。

《小川洋子の「私のひきだし」》

「スランプについて」

皆さま、おはようございます。作家の小川洋子です。『私のひきだし　その2』と題してお話ししてまいりましたこの番組、今日は第4回です。

小説を書いていますと、「スランプはどうやって克服しますか」と尋ねられることがあります。そう質問されるたび、どう答えていいか、困ってしまいます。

果たして自分には、スランプというものがあるのだろうか？　まず、この疑問が湧き上がってきます。スランプが何なのか、よく分からないのですから、克服の仕様もありません。しかし、「いいえ、スランプなど感じたことはありません」と答えるのも、何だか高慢な感じがして気が引けます。ですから大抵は、もぞもぞはっきりしないことをしゃべって、どうにかその場を切り抜けます。

もちろん、気分が乗らない日もあります。今日は書くぞと意気込んで机の前に座ったのに、なぜだか1枚も書けなかった、ということもあります。あるいは、何を書いたらいいのかさっぱり分からなくなって、真っ白な空白の中に取り残されたような気分に陥ることもしばしばです。

それどころか、一行一行、一言一言が挫折の連続です。もっといい表現があるはずなのに、もっといい小説が書けるはずなのに、とイメー

ジの中では傑作が浮かんでいるのですが、実際、パソコンの画面に写し出される文章は、その理想とはかけ離れています。書いても書いても、がっかりするばかりです。これこそ自分が書きたかった小説だ、と心から満足することはありません。

そういう意味では、もしかすると私は、毎日がスランプなのかもしれません。あまりにその状態に慣れすぎてしまい、スランプに対して鈍感になっているのでしょう。

別の見方をすれば、スランプが当たり前の状態で、別に克服しようなどと意気込む必要はないのです。デビューしてから今まで、天から言葉が降ってくるようにすらすらと傑作が書けた、などという経験は一度もありません。つまり、スランプを克服した先がどうなっているのかも、分からないわけです。

ある日、担当の編集者から、「小川さんは信心を持っているから、強いですよね」と言われてはっとしたことがあります。金光教の信心が私にどんな影響を与えているか、一緒に仕事をしている身近な人は、感じ取っているのだなと気づいたのです。

確かに編集者の言うことは正しいと思います。書けない、という泥沼の中でもがいている時、もがきながらも私は決して絶望はしていません。書けない状態の底の底まで行った時には、金光様が助けてくださる、と心のどこかで信じているからです。意識していようといまいと、その最後の救いを信じる気持ちが、私を支えて

いるのでしょう。

別の言葉で言い換えれば、つまりは、諦めるのです。金光教教典に、江戸時代の末から明治にかけて生きた教祖様のこんな教えがあります。

「何事にも、自分でしようとすると無理ができる。神にさせていただく心ですれば、神がさせてくださる」あるいは、「金光大神は、どうにもならない時には、じっと寝入るような心持ちになるのである。あなた方もそういう心になるがよい。どうにもならないと思う時にでも、わめき回るようなことをするな。じっと眠たくなるような心持ちになれ」

諦めた先が「無」ではなく、そこに神様がいてくださる。そう考えることのできる私は、やはり編集者が言うとおり、幸せ者なのでしょう。遠い時代の言葉が、今の私に生きてつながっているのです。

「自分の書く小説など、たかが知れている。もう、ここまで来たらあとは神様にお任せする。神様に書かせてもらう。それしかない」と思えた時、不思議にふっと、新しい光が射すのを感じたりします。書くべき小説の世界が見えてくる。しかしそれを見ているのは自分の目ではなく、自分以外の偉大な何ものかである。そうしてようやく私は、書き始めることができるのです。

私は、「じっと眠たくなるような心持ちになれ」という言葉が好きです。一生懸命考えろ、努力しろ、というのではなく、眠たくなるよう

な心持ちになれ。とても深い優しさを含みながら、難しい言葉です。小説を書いていて行き詰まると、私はすぐに眠くなるのですが、きっとそんな単純な話ではないでしょう。眠っているのと変わらない無の心にならなければ、新しいものは生み出せない、ということなのかもしれません。まだまだ、小説を書く厳しい修業の道のりは続きます。

今日はここまでです。ではまた来週、よろしくお願いいたします。

《小川洋子の「私のひきだし」》

「神と人との関係」

皆さん、おはようございます。作家の小川洋子です。これまで『私のひきだし　その2』と題し、4回にわたってお話ししてまいりましたが、とうとう今回が最後になってしまいました。最終回の今日は、金光教における神と人との関係について考えてみたいと思います。

「金光教って、どんな宗教ですか？」

時々、そう尋ねられることがあります。とても簡単には答えられないので、一瞬、言葉を失ってしまいます。そもそも、言葉にできない何かを心で感じ取るのが宗教であり、1行や2行で表現することなど不可能なのです。

しかし相手は分かりやすい説明を求めて待っています。私は苦し紛れに、こう答えます。

「神様と人間の関係を生み出してゆく宗教です」

そして一つ付け加えます。

「その関係は親と子に例えられます」

独りよがりの単純すぎる解釈かもしれませんが、金光教について何も知らない質問者は、一応これでうなずいてくれます。

関係を作ってゆくとは、つまり、神と人との間柄がいまだ完成されていないということを意味します。何ものにも侵されない絶対的な神がまず存在し、人々を教え導くという図式には当てはまらないのです。

金光教教典には次のような言葉があります。

「人間が神と仲よくする信心である。神を恐れるようにすると信心にならない。神に近寄るようにせよ」

ここで注目したいのは、主語が人間になっていることです。「神と仲よくする」とは、何と人間的な情にあふれた表現でしょうか。近寄りがたい偉い神様を仰ぎ見るのではなく、仲よくするのです。

―氏子あっての神、神あっての氏子―

教祖はこのようにもおっしゃっています。ここでも先にくるのはまず、氏子です。もっと大胆に言ってしまえば、神と氏子が並列に置かれているのです。氏子がいなければ神もない、神がいるからこその氏子。

この関係を親子に例えると、いっそう身近に神様をとらえることができます。人がおかげを受けてくれず苦しんでいると、神も救われない。氏子が皆助かるという神の願いを成就するために、人々は信心に励む。同時に人は、親のような神の愛によって守られている。生死を超えて神の営みに自分を委ねることができる…。

このように神と人が分かちがたく平等な関係を結んでいると考える時、一つ、浮かんでくる小説の場面があります。それは、私がかつて読んだ小説の中で、登場人物の姿に現れ出た神の存在に、最も深く心揺さぶられた場面です。

小説はアメリカの作家、ジョン・スタインベックの代表作『怒りの葡萄』です。１９３０年代、干ばつと大恐慌に見舞われ、土地を追われた小作農のジョード一家は、おんぼろのトラッ

クに家財道具一切を載せ、新しい生活を夢見てカリフォルニアへの旅に出ます。貧民キャンプを転々とする過酷な道中、祖父母は病に倒れて亡くなり、長男は殺人事件に巻き込まれます。どこへ行っても肉体労働によって搾取され、よそ者として差別され、暴力にさらされます。ただ唯一の希望は、長女のローズ・オヴ・シャロンが妊娠したことでした。しかし、未来の灯りとなるはずだった赤ん坊は死産でした。

納屋の干し草の上に横たわっていたローズ・オヴ・シャロンはそこで飢え死に寸前の男を見つけます。そして、胸をはだけ、赤ん坊には与えることのできなかった母乳を、その名前も知らない男のために飲ませるのです。

ローズ・オヴ・シャロンの行いの中に、私は親神の働きを認めることができます。彼女はその行いによって他者を救い、また赤ん坊を失った自らの哀しみを癒やします。与えることによって救われているのです。

この場面を読んだ時、神と人が一体となり、互いに手を携えて困難な世界を救おうとしている、金光教の大事な教えを目の当たりにするような気持ちになりました。神の働き、おかげは、人を通して現れる。人がいなければ、神もその役目を果たせないのです。

私たちはあらゆるところに神を感じ取ります。それは決して言葉に置き換えたり、分かりやすく目に見えたりしない形で、潜んでいます。人間のほうがちゃんと心でキャッチし、そのおかげに感謝する気持ちを捧げてこそ、初めて神

は本当に存在できると言えるのではないでしょうか。

以上、５回に渡って自由にお話しさせていただき、私自身、改めてまた自分のすぐそばに神様を感じることができました。聴いてくださった皆様方のお心にも何らかの形で安らかさが届いていれば、と願っております。

本当に、どうもありがとうございました。

《信心ライブ》

「くされひざ」

おはようございます。今日は、大分県・金光教日田教会の堀尾光俊さんが、平成30年４月に、金岡教会でお話しされたものをお聞きいただきます。

これは自分自身に言い聞かせて、それからご信者さんにも申し上げることですが、「老いるおかげ」「老いる喜び」ということを最近よく言うのです。「老いる」というのは分かりますよね、エンジンオイルじゃありませんよ（笑）。「老いる・老ける」ね。ところがそのことを悔やむ、不足を言うご信者さんが多いですね。「もう最近ダメです。耳は遠くなって、目は薄くなって、腰は曲がって、ひざは痛いし、腰は痛いし」。私はね、そういう時にいつも言うんです、「お礼が足りんよ、老いるおかげのお礼が足りんよ」と。

以前、風邪をひいた時に、市内の行きつけの内科に行かせてもらった。待合室で待っておりましたらね、80代のご婦人が２人、待合室のベンチに座っておしゃべりしていました。そこに玄関からまた１人の80代の同じ年位のご婦人が入って来られた。まだその友達の所まで着いていない、３、４メートル位手前からこちらの人が見つけて声をかけた。「誰々さーん、ここ、ここ」とか言ってね。その方が、おっちらおっちらと歩いて来られて。いよいよ手前の所でこ

っちの方がね、「久しぶりね。最近どう？　元気？」と声かけて。それを言われたそのご婦人が、「私はね、もうこのひざさえ良くなれば、あとはどこも何ともない。ひざが痛くてひざが痛くて。ひざが悪くてひざが悪くて、えーい、もうこの腐れひざ」と言うた。「腐れひざ」って分かりますかね、うちのほうの方言でしょうけどね。ニュアンスは分かるでしょ。褒め言葉じゃないですよ。「こん畜生」という感じですよね。「ろくでなし」とか「役立たず」という意味合いを込めて「この腐れひざ」と言ってポンと叩いた。私、それを聞くとはなしに聞こえますからね。ご無礼なことだなと。もしこれでひざに性根があって、心があって、しゃべれたら何て言いますか。「婆さん、よくも言うてくれたな、腐れひざだと。80数年間あんたのために、雨の日も風の日も雪の日も、歩いて来たんだぞ、俺は。旅行にも行ったし、買い物にも行った。小学校にも行った、孫と一緒に。そのことに一言の感謝、お礼もせずに、80過ぎてこの腐れひざだと。よう言うてくれたと。分かった、金輪際、一歩たりとも歩いてやらんぞ」と、もしこのひざが言ったらお互い歩けないんですよ。そうでしょ。言葉をしゃべらないから、私たちは当たり前に思って、ひざが悪いと言うけれども、ひざが悪いんじゃないんでしょう。長いこと使わせていただいたということですよ。「ひざが悪い、ひざが悪い、この腐れひざ」。これは怒りますよね。聞いてて私、本当にそのように思いました。

四代金光様がですね、ずっと坐骨神経痛も悪かったし、ひざも痛かったということですね、ご晩年はね。そういうお話を聞かせていただいたことがあります。毎日お風呂に入った時に、足をなでさすりしながらね、湯船の中でしょうね、おそらく。「足さん、足さん、今日も一日ありがとうございました」。なでさすりしながらお礼を申すそうです。そして、「どうぞ、明日もよろしくお願いいたします。歩かせてください」と。毎日お風呂に入った時にそうされるそうです。そして、その後に仰ったのが、「おかげで今日まで、一度も差し支えなく歩かせていただいております」。杖はもちろん突かれてましたけどね、けれども「差し支えなく歩かせていただいております。ありがたいことであります」と、こういうお話を聞かせていただいたことがあります。

ありがたいという事が無いんじゃないんですね。ありがたいと受け止める心が無いんです。違いますか。ありがたいっていう事はいっぱいあるんですよ。昨日も夜休めた。朝目が覚めた。手足が動く。食物がのどを通った。排尿排便いただいた。「ありがたいな」ということはいくらでもある。「私は腰が少し痛いけれども、孫が今日も元気に学校へ行かせてもらいました。ありがとうございます」。ありがたい事はたくさん。ありがたいと受け止める心が育ってない、ということなんですね。

私、本当にそれを今思います。白内障の手術もしましたからね右眼は。「白内障の手術をさ

せていただくような年まで命を頂いております。ありがとうございます」、この心が大事なんじゃないでしょうか。

良いも悪いも、好きも嫌いも、ありがたいもありがたくないも、うれしいも悲しいも、全部、私ども一人ひとりの心が決めるんです。同じ現象であっても、それをありがたいと思う人と、不足に思う人とあるんですね。それは、めいめいの心がそう思うんです。だから心が問題なのです。心が育たないと危ういのですね、人間ってね。やっぱり、心を育てさせていただかねばならないということを思いますね。

「ありがたい事が無いのではなく、ありがたいと受け止める心が無い」とは、本当にそのとおりだと思いました。ご婦人も、「このひざさえ良くなれば、あとはどこも何ともない」と仰っていましたが、裏を返せば、ひざ以外は全て良いということですよね。

私も小学生の時、足を骨折して不自由な思いをしたことがあります。そして、その時に当たり前のように歩けるありがたさを感じたのを思い出しました。でも日が経つとその気持ちは薄れています。改めて毎日、自分の体に対して、「今日もありがとうございます」と、感謝する心の稽古が必要だと思いました。

《信者さんのおはなし》

「ガラス食器を扱うように」

（ナレーション）

福岡県は筑前町（ちくぜんまち）にある、金光教夜須（やす）教会にお参りする砥板峰子（といたみねこ）さんは、年齢が60代半ばになるご婦人です。４人のお子さんと７人のお孫さんに恵まれ、今は夫と二人で生活しています。

峰子さんは24歳の時、４歳年上の文孝（ふみたか）さんと結婚しました。以来、夫婦に訪れた幾度かの転機を経て、今は夫が立ち上げた、キッチン用品のインターネット通販会社で働いています。そこで扱うのは、ガラス製の耐熱ボウルや保存容器、お皿やお茶碗など、多岐にわたります。家でも仕事場でも、ずっと夫と一緒です。

（砥板）

私たちずっと朝からですね、ずっと一緒にいるんです。朝起きて、朝参りしましてね、帰ってきて朝ごはん食べて、昼ごはん食べて、ずっと一緒におるんですね。で、「あんたたち、けんかせんと？」と人から一回だけ聞かれたことがあるんですけど。なんか、けんかするともったいないよねって。時間ももったいないし、心もなんか穏やかでなくなるし。「けんかしたらもったいないですよね」って言ったことがあるんですけど、「そう！」って感心されてましたけどね。ムッと来る時はあるんですけど、「あっ、待て待て」と。「夫婦仲良くせよ」って教わっているから。主人も私に対して何も言いませんしね。なんかやっぱり夫婦げんかって自分

の領分の中に入ってこられると嫌だから、そこのところは行かないようにして（笑）。でもそれって誰もが当てはまりますよね、親子関係でも、友人関係でも、夫婦に限らずですね。それとか、人を尊重するとか、そういうのはですね。そしたらけんかがなくなるんじゃないかなって思う時もありますね。

（ナレーション）

このようにお互いを信頼し、尊重し、毎日仲良く暮らすお二人は、これまでどんな生き方をしてこられたのでしょう。

お二人はともに金光教を信仰する家庭で育ちました。教会の先生からは、「お礼が六分（ぶ）、おわび三分、お願い一分」と教えられ、その教えをずっと大切にされています。お礼は、恩に報いること。おわびは、改まること。お願いは、すがることです。二人は、毎日の生活の中でその教えに取り組み、お礼とおわびを大切にしていると、お願いは自然に付いてくるのだと実感されていきました。

夫である文孝さんは、48歳の時に、勤める会社でリストラを経験しました。しかし、すぐに今の会社につながるキッチン用品の販売会社を立ち上げることができ、順調に売り上げを伸ばしていきます。しかし、文孝さんが58歳の時、大腸がんと胃がんを患っていることが分かりました。

峰子さんはこの時54歳。当時の勤め先では、管理職の立場にありました。すぐに頭に浮かん

だのは、数年前に亡くなった夫の母のことです。仕事で忙しい自分の代わりに、よく子どもたちの面倒を見てくれた母でした。母の体の具合が悪くなっていった時に、もっと母の看護をしてあげればよかったなあ、という心残りがあったのです。だからこそ、今度は後悔がないよう、夫の看護をしてあげようと、スパッと仕事を辞める決心が付きました。

峰子さんの看護の甲斐もあって、文孝さんの手術は成功し、順調に回復していきました。その後、峰子さんは夫の会社で働くことになったわけです。

「恩に報いる」というお礼を大切にする砥板さん夫婦の生き方は、お世話になる人を大切にする、物を大切にすることにつながって、今のキッチン用品販売会社の経営姿勢にも生かされています。たった4人だけの会社ですが、お客様を大切にする対応によって、今では超優良販売サイトとして評価されるようになりました。

また、こんなエピソードも教えてくれました。

（砥板）

孫が7人おりましてですね。3歳くらいの孫がたぶん保育園で習っていると思うんですけど、靴をきちんとそろえて上がるんです。うちに遊びに来た時にですね。普通でしたらポンポンと脱いでですね、上がってくるところなんですけども、後ろを向いて、そろえて上がってくるんです。一緒に住んでるわけではないからですね、その光景がとってもかわいくてですね。

そしたら主人もですね、いつの間にか、そういうようなことをするようになったんです。毎日、毎回ですね。帰ってきたら、そろえて上がってくる。そういうのはしてますね。

（ナレーション）

決しておごることなく、周りから吸収していくという文孝さんの姿勢は、教会で教わった、「ありがとうを1日に千回言う」というお話をすぐに実践することにもつながっています。

（砥板）

千回も言うなら、何を言ったら千回になるかいなと思って、試してみたそうです。そしたら、朝起きて、ありがたいなと思って「ありがとうございます」。枕見たら「ありがとうございます」。ずっと数えよったら、車も降りた時には「ありがとうございます」と言ってたけど、乗る前にも「ありがとうございます」。ドアを開けて「ありがとうございます」。ハンドル持って「ありがとうございます」って言ってたら、「ほう、やっぱり千回くらい言うばいね」と自分で言っておりましたからね。そのありがとうと言う感謝の言葉はですね、最初の頃はですね、「あざーす」「あざーす」て聞こえてたんです。「ありがとうございます」を短縮して。「あざーす」「あざーす」という言葉がありますよね。あんなふうに聞こえてたんですけど、何を言いよるかと思ったらお礼を言ってたんです。「ほんとに千回以上言うよね」って話しておりまし

たからね。ありがとうという感謝を心の中で、と思いますけども、口に出して言っておりますね。

（ナレーション）

ご夫妻は、これまで、リストラや病気などの大きな難儀があっても、「なんとかなるさあ」と神様に心を向け、売り物のガラス食器を扱うように、周りの人や物を丁寧に扱い、「恩に報いる」生き方で、しなやかにその都度その都度おかげを受けてこられました。全てを明るく軽やかに語る峰子さんの表情は、「これからも何があっても大丈夫、二人で乗り越えられる」と自信に満ちています。先祖から受け継いだ信心というバトンを、今度は子どもたち、孫たちに受け継いでもらいたいと願っての二人三脚は、今日もその歩みを続けています。

《信者さんのおはなし》

「神様の物差し」

（ナレーション）

現在、64歳の山本さんは、かつて外資系メーカーでバリバリ働く営業マンでした。妻の真子（しんこ）さんと出会って、金光教を知りましたが、信仰に否定的ではないものの、自ら求めてはいなかったと、当時を振り返ります。

（山本）

何に対してでも、自分が乗り越えて行かないかんことをですね、神様にお願いして。はっきり言うと、人間としてはあまり強い人間ではないのかな、弱い人間だなというふうな考えがありましたので、私自身は、無神論者でした。

（ナレーション）

そんな山本さんが三十代の頃、金光教の教会に参拝するようになりました。きっかけは、雨降りの下り坂で、タクシーに追突してしまったこと。幸運にも、運転手との示談がまとまって、大事にならずに済みました。

（山本）

私は、ラッキーとだけ思いました。ラッキー。これくらいで済んで良かったなと思いました。で、その後、妻がですね、そこにお教会があるから御礼に行かないかん、と言うんですよね。私にしたら、「なんでや、なんでこんなんで御

礼に行かなあかんねん」と思いましたけど。その時の妻の迫力は、すごかったですね。

（ナレーション）

それまで、一度も信心や参拝を勧められたことなどなかっただけに、山本さんはびっくりしました。教会では、先生に事故のことを聴いてもらいました。先生に話を聴いてもらうことを、金光教では「取次（とりつぎ）を頂く」と言います。神様と私たちを取りもっていただくという意味です。

先生は、「運転は、自分でしているように思っているけど、いろんな自動車があって、道があって、運転させていただいているのだからねえ」と、話をしてくれました。それは、「自分の力でできることは限られている。私たちは、神様に生かされているんだ」という意味合いで、とても印象に残ったのでした。

（山本）

その当時、外資系に転職して。自分で、実力主義の会社でと、勝手に思って。やっぱり自分はできているんだと思ってましたし。日々の夫婦生活の中で、我（が）の強い生き方をしていたのだと思いますね。だから、たまさかの事故ですけども、私自身が、そういう自己中心的な生活を進めているということを、彼女はやっぱり感じていて、そこが問題だというふうに思っていたんでしょうね。

（ナレーション）

このように当時を振り返る山本さん。自然に金光教への興味が生まれ、金光教の本を読んで、教会へも参拝、取次を受けるようになっていったのでした。

（山本）

自分の中にある、人間の得手勝手な損得の物差しと、神様の物差しとがあったら、私は神様の物差しが正しいと、皆に言っているんですけど、人間の物差しを使っていることが多々ある。それを、お結界（けっかい）で、この物差しを校正させていただく。

自分の中で御取次を頂いたことは、そのことに取り組ませていただく課題として腹が据わるというか、そういう感じはします。

（ナレーション）

40代後半のこと、勤めていた会社が買収されて、リストラの危機が、突然身に降りかかりました。「もし仕事が無くなれば、2人の子どもを、私学に通わせ続けるのも難しくなる」。つらい胸の内を、何度も教会の先生に聞いてもらいました。夜も眠れず、自宅の神棚に祈ったと言います。

ある夜のこと。神様に祈っていると、「人の身が大事か、わが身が大事か。人もわが身もみな人」「神様は無駄ごとはなさらない」「四季の移り変わりは、人の力の及ばざること」「先を楽しめ」という4つの教えが心に浮かんだそ

うです。

（山本）

その時、自分は何をしているんだ。自分の心配ばかりしている。自分がどうなるか。でも今、あなたの御用は、営業の部門のものであって、自分のスタッフやそういうことに対して、全く気持ちがいっていない。我（われ）がどうやばかり思っていたんですね。そのことをとおして、なんかそれを思わされて。

（ナレーション）

一年ほどの時間をかけて買収問題は決着。退職者も一人も出ませんでした。山本さんも、新しい役職に就いて、働くことになったのです。

（山本）

この時は、「あーっ」と思いましたから。これが、自分にとっての転機であり、おかげだなと。そのことはね、そうなったという結果もそうなんですけど、自分自身が、お結界で取次を頂いてて、もう本当に泣きそうになって。そんな時に、４つの教えが頭に浮かんで…。結果ではなくて、その事柄をとおしてですよね。問題に対して乗り越えさせていただける。

（ナレーション）

困難な問題を、人間の損得の物差しでなく、神様の物差しで見直すことは、安心へのプロセスだと確信する山本さん。今の思いを次のように語ります。

（山本）

将来に対する不安とかいったら、今は、私たちがサラリーマンだった時以上にあるのではないかと。だとしたら、自分が経験してきた中で言えば、そのままだと本当に間違った方向に行ってしまうこととか、自分では耐えきれずにそこで挫折してしまうことがあっても、取次を頂いて、自分のその方向を、もう一度改めて俯瞰するみたいに。神様から、今、自分はどう見られているか。神様は絶対に、良い方向をお示しくださっているんだということを頂ければ、本当に泣きそうになっても、そこから新しい展開が生まれるんと違うかなと思って。それをさせていただけたらと思うのが、まさに今。私はいつもそのことを思っています。

（ナレーション）

第一線を退いた今、次の世代に安心のバトンをつなぎたい。篤い願いが込められていました。

《信者さんのおはなし》

「こじらせ都に愛のハグ」

（ナレーション）

福岡県柳川市の金光教不知火教会で、江崎都さんのお話を伺いました。都さんは現在44歳。お話は子どもの頃にさかのぼります。

（江崎）

家が専業農家で忙しかったっていうのもあって、あまり私と一緒に構ってくれる時間が無くって。ほんとに母親は常に忙しいから、背中の印象しかないんですよ。父親はご飯の時だけ一緒にいて、さっさと食べて、すぐ仕事に行くか寝るかっていう感じで。だから小学校低学年ぐらいまではちょっと覚えてないんですけど、物心ついた小4、小5とかそれぐらいからは、ちょっとこう感情が…、「今日学校でこういうことがあったよ」っていう、そういう事実は言えるんですけど、その時に、「こういうのが嫌だった」とか、「こういうのがうれしかった」とか、「こういうので悩んでる」とか、なんか、そういうのは言わないような…、そんな子どもだったと思います。

小学校、中学校、高校というふうに年を重ねていくうちに、ちょっと「こじらせ」が出てきまして…。もう成長していくに連れて、どんどんひどくなっていったというか…、そんな感じですね。勉強はしたくなかったんだけど、やっぱりなんか、学校の先生に褒められたいとか、

親に褒められたいとか、良い子でいたかったので、嫌々ながら、たぶん心はめちゃくちゃ嫌だったんですけど、なんかやってました。

勉強は好きじゃなかったんですけど、勉強はまあまあできました。ほんと、大学に入って初めて、自分というのを見せつけられた感じで。入学して最初って、もう、みんな友だちを作ったり、サークルに入ったり、ワイワイガヤガヤ楽しくしてるんですけど、私はほんとに人とそうやって話したり、表面的にはするんですけど、打ち解けて話すのがすごく苦手だったので、ほんとに自分の家でいるのが好きとか、特定の仲良い人といるのだけを好んで。とにかく家で一人で本を読んだりっていう大学生活が、４年間…、結構長かったと思います。ひと言で言うと、灰色って感じなんですけど。

（ナレーション）

大学を卒業した都さんは、いくつかの仕事を経験します。でもそれは、なにか、もやもやした生きづらさを抱えた数年間でした。しばらくは東京で働いていましたが、29歳の時、福岡に帰ってアスパラガスの栽培をすることに。そこでの、旧友・ゆきちゃんとの再会が、都さんを金光教の教会へ導くことになります。

（江崎）

ゆきちゃんは私の高校の時からの大親友で、高校1年から3年まで同じクラスだったんですね。で、その子が金光教のご信者さんというか、

お父様が熱心に信心されている方で。ゆきちゃんも、私と同じ時期に地元のほうに帰ってきて、2人とも独身で、彼氏もいないので、なんか、仕事帰りにお茶飲んで、いろいろ話してたんですけど。彼女も、お母さんの死というのをきっかけに、教会にお参りに行くようになって。で、その頃からすごくその話の内容が、ここの不知火の教会のお話とか、先生ご夫婦の話とかを楽しそうに…。ほんと毎回、会うたびに、「先生がね、こうしてね」とかいうような話をしていたんですけど。ま、ほんと、これちょっとあれかもしれないですけど、奥様先生がやんちゃだった頃の話とか、教会のご夫婦がすごくラブラブなこととか。「もうなんかダーリンて言うとよ」とか、そういう話とか、なんかいろいろ教会の先生らしからぬ話をしてきて（笑）。やっぱり一般人としては「聖職者」みたいなイメージがあるから、普通の人なんだなと思って。会ったことなかったので。「ふーん、おもしろいねー」って思って、当時は聞いてました。

それで、ゆきちゃんは、やっぱり心を、どんどんどんどん育ててもらって、ゆきちゃんは、結婚ということにまでなったんですね。当時、お互い独身で彼氏もいなかったのに、もう、あれよあれよという間に結婚っていう流れになって。それでなんか、やっぱり私、うれしいけど何とも言えない複雑な気分で。その、結婚の報告受けた時に、たぶん、私が何とも言えない顔してたんでしょうね。それを見てゆきちゃんがおずおずと、「2月に報徳祭ってお祭りがあ

るんだけど、教会に来ん？」ていうふうに。「まあ全然気負わんでいいけん。先生たちも良い人たちやけん、来ん？」みたいな感じで言われて。そのお祭りに行ったのが、ここに初めて足を踏み入れた最初です。その時はなんか、ほんと遊び感覚で、「あ、行っていいのかな」って思って。 興味本位で、じゃあ行ってみようかな、行ってみようって思って。行ったら、ほんとに、奥様先生がですね、最初に私を見て、「わーっ」てハグしてくださったんですよ。「よう来たねー」って言って。そこで私、もう度肝を抜かれたというか。なんだこのアメリカ人はと思って（笑）。アメリカ人はって言っちゃいけんけど。わー、なんかすごいなと思って。この、受け入れるというか、もう有無を言わせない、この包容力というのにちょっと度肝を抜かれて。そこでこう一気にふわっと軽くなったっていうのはありますね。

（ナレーション）

それから8年。都さんの人生にもいろんなことがありました。結婚もしました、子どもも2人授かりました。悩んだこと、うれしかったこと。そのたびに、教会の先生に話を聞いてもらいました。そんなこんなするうちに、都さんの心にも少しずつ変化が現れてきたようです。

（江崎）

私、本当に派手な悩みとかないんですよ。離別があった、死別があった、すごいお金の問題

があったとか、本当にそういうのがなくて。とにかく自分の心の扱いづらさでずーっと悩んできて。うん。心が動かなかったことが、本当にきつかったんですよね。何も心が動かない。うれしいもない、喜びもない、悲しいもない、みたいな…。それが一番きつかったんですけど、今はなんかその心が動くということがとっても幸せなことだなって。何を得たとか、何になったとか、そういうことじゃなくて、心がいろいろ動く、ということが何よりの幸せだなって思います。なんか世界が色づいて見えるというか。ちょっとかっこいい言葉で言いますけど。そんなふうに感じてます。

《信心ライブ》

「心配を祈りに変えて」

（ナレーション）

おはようございます。今日は、高知県、金光教越知教会の西川英資さんが、平成30年、51歳の時に金光教本部でお話しされたものをお聞きいただきます。

西川さんは、二十数年前に血液検査で、C型のウイルス性肝炎という診断を受け、数値が正常値の数十倍を示したため、すぐに入院することになりました。当時はまだC型肝炎のことがよく分かっておらず、薬の種類も多くありませんでした。一つだけ副作用の強い薬を投与され、肝機能の数値は正常値になりましたが、完全に治ったわけではなく、ウイルスがなくなるまでは油断がならないと、しばらく入院治療をしました。しかし、当時はこれ以上の治療はできないということで結局、退院になりました。

それから十年に一度、ウイルスの検査をしましたが、ウイルスは消えず、心配も増していきました。そのような中で大切なことに気づかれます。

（西川）

これは神様のおかげを頂かんことには前に進むことができない。神様のおかげを頂くことしか他に道はない。そういう大きな難儀を目の前にした時、一生懸命神様にお願いをするわけでございますけれども、しばらく時間がたちます

と、大丈夫かなあと、この問題は解決する日をみることができるんじゃろうかと、このように不安な気持ち、心配な気持ちが湧いてまいります。問題が大きければ大きいほど、心の中でいっぱいになります。

神様にしますれば、一度神様にお願いをしておいてですね、たびたび「大丈夫でしょうか。神様、この問題は本当に解決していただけるんでしょうか」。このように申しますことは、ある意味、疑いをぶつけておるように神様はお感じになっておられるんじゃないかなと、そのように思うわけでございます。

神様に一度お願いをしたら絶対に神様におかげを頂くはずだ、間違いなく神様にお願い申し上げたんだから絶対に大丈夫だと、絶対に神様を信じる心と申しますか、それを持たせていただきたいと思うわけでございます。心配する心を、絶対に神様を信じる心に変えよと。

（ナレーション）

そんな決心ができ、西川さんは神様を信じる稽古に励みました。しばらくして町の健康診断を受けた時に、お医者さんから、「もう一回治療にチャレンジしてみたらどうですか？」とうながされました。そして治療をするために精密検査を受けたところ、何と、「ウイルスは検出せず」という結果が出たのです。体内にウイルスがない、消えているということです。「もう治療の必要はありませんからお帰りください」という結果に、西川先生は驚いたといいます。

（西川）

少しパニックのような状態でありましたけれども、帰りの道すがら、神様はすごいなあと。その結果うんぬんではなくて、こういう結果を私に下さったんだなあと。導いてくださったんだと、そのように強く感じさせていただいたのでございます。医学的にこの一連のことを説明と申しますか、理由づけはおそらくできるかもしれません。ですけども、私自身にとっては、神様がこの結果を導いてくださったんだとしか思えないのでございます。

（ナレーション）

その後、西川さんは、教会にお参りされる方々が命に関わるような病気をされることがあると、以前に神様に祈念したことを書き留めた帳面をめくっては、「ああ、この方はかつて、こういうおかげを頂かれたなあ」「あの時にはあいうおかげを頂いたなあ」と振り返るそうです。そして、その一つひとつをさかのぼって、その方に代わって、まず以前のおかげの御礼を神様に申しあげ、その後、その方のために改めて神様にお願いするのです。

（西川）

自分はここまでおかげを頂いてきた。その一つひとつを、「ようおかげを頂いた、あの時もおかげを頂いた」と振り返らせていただき、一つひとつを、改めて、共に神様に御礼をさせて

いただいて、「このたびの問題も必ずおかげになるはずだ」という思いをもって、目の前の問題に取り組ませていただく。この内容は、いつでも誰でもどこでもできることかと思います。この時の事柄だけではなくて、おかげを頂いてありがたかった、その時の自分の心の動き、感動まで思い出すことができたら、十分かと思います。

「神様がありがたい」というこの気持ちを思い出していただいて、目の前の問題に、改めて、「このたびも絶対におかげを頂くんだ」という思いで取り組んでいただくことが、大切なことであろうと思わせていただきます。また、そういう気持ちになることが、神様への誠意だと感じさせていただいております。

（ナレーション）

何か問題が起きた時、心配する心を祈りに変える。これまでを振り返って、あの時はこう助かった、あのように救っていただいたと、神様に御礼を申し上げることができれば、それはすでに助かりへの階段を上り始めているということになるのでしょう。

《信者さんのおはなし》

「人を思いやる心」

（ナレーション）

愛知県刈谷市にある、金光教三河刈谷教会にお参りする大畑貞司さんにお話を聞きました。

大畑さんは、昭和23年生まれの74歳。５人兄弟の次男として、静岡県に生まれました。共働きだった両親は忙しく、同居の祖母が、大畑さんたちの面倒を見てくれていました。

金光教の信心を熱心にしていたおばあさんは、大畑さんの手を引いて、よく教会へお参りしていました。両親と過ごせなくても、寂しさを感じさせない楽しいひと時。大畑さんは、おばあさんの人柄をとおして、人を慈しみ、思いやる豊かな心を育んでいきました。

（大畑）

おばあさんがやっぱりすごかったですね。昔は、物乞いの方が多かったんですよ。うちは貧乏だったけど、とにかく、お米をちょっとあげたり、麦をあげたり、そういうことはやってたんですよね。まあ、他のところは癖になるからやらないということはあったんですけど、おばあさんは、とにかく人を思いやるということは、すごく強い人かなと思いますね。

（ナレーション）

大畑さんは幼い頃からサッカーに明け暮れ、大学を卒業するまでに多くの大会で優勝する経

験を重ねました。おばあさん譲りの、人を思いやる心をチームプレーに生かし、選手として活躍したのです。そして、サッカーチームのある会社に就職しました。

好きなサッカーができればそれだけで十分だと思っていましたが、やがて責任を伴う職務も任されるようになっていきます。そんな中、30代の終わり頃から、なぜか直属の上司から厳しい叱責を受けるようになったのです。

（大畑）

係長の時、上司から毎朝呼ばれて、みんなの前で叱られる。それが一時間だとか、それぐらいですね。最初は何のために怒られてるかっていうのが飛んじゃって。とにかく、そんなのが毎日続いたことがありましてね。その時に一回妻にも「辞める」と言って。まあ、妻も「辞めてもいいよ」と言ってくれて。次の日すっぽかしたんですよ。そしたらその晩に、その上司の人から電話がうちへ入りましてね、「大畑君、悪いけど明日、一回顔だけでも出してくれ」って言われて。まあ、そっからはちょっと、セーブしてくれるようになったんですけど。

（ナレーション）

退職は思いとどまりました。そして、つらい気持ちを抱えながらも、「上司は自分を育てようとしてくれているのではないか」と思い直し、同じ職場で仕事を続けました。

40代の終わり頃、思ってもみなかったことが

起こります。何とその上司が、大畑さんの昇進を会社に後押ししてくれたのです。

（大畑）

まあ結局、今思うと、その方のおかげで、今の自分があるのかなと。その方が結局私を押してくれたんですよ。たまたま私が大卒だったもんですから、その頃はまだ高卒の人でも優秀な人がいっぱいおったんです。それで私が課長だなんて、全然そんな出世とか私は思わんで会社に入ってますからね。「とにかくやればできる。やってみろ」とか言われちゃって、その上司の方にですね。一方では「なんだよ」っていうようなことがあったんですけど、やっぱり思い返すと、私を押してくれたっていうねえ、それがやっぱり、すごく感謝せないかんなと思って、そうでないと、今の自分の生活がなかったと思うんですね、やっぱり。

（ナレーション）

大畑さんにとって、この昇進はありがたいことではありました。けれども、職責を果たそうとする強い思いが、大畑さんの心を、知らず知らずのうちに苦しめていったのです。

（大畑）

職務は結局与えられたんですけど、やっぱりすごいプレッシャーがあって、一時期パニック障害になったんですね。とにかく車の運転ですね。出張にも行かにゃあいかん、車を運転せに

ゃいかん。そうするとね、トラックにガーっと挟まれちゃうと、怖くなっちゃって。後は電車ね。混雑した電車に入ったらもう、息ができなくなっちゃう。それがしばらく続きましたね。

（ナレーション）

常に薬を持っていないと不安になってしまいます。そのことは教会の先生にも伝えていました。先生は大畑さんのことを以前からずっと祈ってくれていました。

ある日の病院帰り、教会にお参りした大畑さんに、教会の先生は、「今もらってきたそのお薬を、ありがたく頂きなさいよ」と話してくれました。それからの大畑さんは、症状が出た時も心を落ち着かせ、祈りながら薬を飲むことを心掛けるようになりました。

（大畑）

そういう症状が出ると、わきに車を止めて、しばらく「金光様、金光様」と念じて、唱えながら、しばらく休んで、それからまた運転させてもらってました。ずっと私も長引くかなと思ったんですけど、ある時ほんとにピタッと止まっちゃったんですね。

（ナレーション）

どうしてパニック障害になり、どうして症状がなくなったのか、はっきりしたことは分かりません。もしかすると大畑さんは、自分の会社はもちろん、取引先や会社の仲間、その家族の

ことを思うがあまり、昇進による職責の重さを、自分一人で背負い過ぎていたのかもしれません。

教会の先生との関わりのなかで回復へのきっかけを得て、その後も昇進を重ね、無事に定年を迎えることができました。

そして今も、仲間とサッカーを楽しむ大畑さん。「サッカーができる、孫の世話もできる。何事も当たり前ではない、ありがたいことだ」と神様に感謝しながら、人を思いやる心を育ててくれたおばあさんのように、孫との時間も大切にして暮らしています。

《信者さんのおはなし》

「祈る気にさえなれなくても」

（ナレーション）

岩崎一英さんは、昭和21年生まれの76歳。幼い頃からお母さんと一緒に、大阪府にある金光教天下茶屋教会へお参りしていました。

大学卒業後は機械設計の会社に就職し、結婚もしましたが、「自分の力を存分に発揮したいから」と、会社を辞め、新たに仕事を始めたのでした。それは、自動車の電装品を扱う商いです。雨の中、大きなトラックの下に潜り込んで修理するなど、必死に働く日々でした。

自ら興した会社を切り盛りしながら、教会の先生のお手伝いもして、熱心に信心を続けてきました。

（岩崎）

まあ、だから30歳から40歳ぐらいまでは、もうそういう現場で、真っ黒けになって働いてました。

少々何があっても、まあまあ、教会に参拝したら神さんが助けてくれると。ま、日頃からそういう神さんとの付き合いですね。

（ナレーション）

岩崎さんの会社は徐々に発展していきます。産業機械メーカーと連携し、日本全国をカバーする体制が整い、やがて海外への足掛かりもできました。

ところが、６年ほど前から、海外の会社に部品の製造を依頼し、調達する準備を進めていたところ、そのことが、経営の問題となって降りかかってきます。

（岩崎）

今、私が千本作ると言っても、千本だったら作ってくれないんですよね。一万本だったら作る。注文を入れないと開発してもらえないんで、「じゃあ、これを一万本注文します」「じゃあ、これも注文」。そうやってどんどんどんどん計画して作っていって。それが3年ぐらいかかって、まとめて、どーっと入って来たんですよ。そしたら、お金無いですよね。

あと数カ月かというくらいまで追い詰められてですね。弁護士さんのところに、８月ぐらいに行きまして。12月の末ぐらいに、もう閉めよかというところまで資金的に追い詰められて…。

（ナレーション）

３年前の令和元年、会社の事業そのものは順調だったのに、資金繰りが厳しくなり、年末をもって会社を清算しなければならない事態に追い詰められたのです。

実はこの時、73歳の岩崎さんは、もう一つ、大きな問題を抱えていました。それは、自身の健康問題。この年の初めの健康診断で、悪性リンパ腫が見つかっていたのです。

岩崎さんに見つかったのは、年（ねん）の単位でゆっ

くり症状が進んでいく、濾胞性リンパ腫でした。悪性度は低いとされていますが、急に性質が変わることがあり、そうなると急速に病状が進行するといいます。

岩崎さんが、通院しながら放射線治療を受けたのが、その年の8月のこと。会社の後始末を弁護士に相談したのも同じ月のことでした。この厳しい状況は、岩崎さんを追い込んでいきます。

（岩崎）

それだけのことが、がばーっと来たというのが…。体は悪くなる。会社は危ない。信心してこんなことになるんやったら、拝んでも拝まんでも一緒ですよね、と思いました。こういうこと言うとあれやけど、ご祈念したからという て、お金が天から落ちてくるわけじゃないしね。はっきり言うて、お金の問題やから。これは、本当にどうしようか思いましたよ。

（ナレーション）

追い詰められてしまった岩崎さんは、食事ものどを通らず、睡眠薬を飲んでも眠れません。これまで事あるごとにお願いし、その都度、良いように道をつけてくださっていた神様に祈ることもできなくなり、教会の先生に、神様への不満をぶつけることさえあったといいます。けれども、神様は、そんな岩崎さんを放ってはおきませんでした。

（岩崎）

人の力ではどうにもならんことがね、一枚ずつ、こうやって、はがすように解決して行ったんです。会社のほうは、ある銀行がちょっと融資してくれて。はっきり言うて、億というお金が調達できたんです。

（ナレーション）

突然、これまで取引のなかった銀行から、多額の融資の話が持ち上がり、資金繰りのめどがついたのです。年末で会社を畳まざるを得ないと考えていましたが、「これなら1月までいける」「2月まで大丈夫」というように、経営は安定していきました。

また、時を同じくして受けた、放射線治療の効果を調べる検査も、「経過観察でいい」というれしい結果をいただくことができたのでした。

岩崎さんは、当時を振り返ってこう話します。

（岩崎）

私はご祈念も何もせんかった。できなかったんで。妻のご祈念、それから親しい信者さん方が、体のことですよね、ご祈念してくださったりとか…。で、先生もご祈念してくださって、それで妻もご祈念。やっぱりそれで私も…救われたんですね。

そこがやっぱり、神さんの、不思議なもんが出てきてるんですよね。これは一般の人に言うても、「銀行が来てお前助けてくれただけや」

と言うて、話が済んでしまいますけど、私はそうじゃなくて、やっぱり、そこには、この岩崎というのを生かそうという大きな力がどっかで働いたんだと思いますよ。信仰というのは信じることしかないんですよね。生かそうとする、もっと超越した力が、やっぱり…。それを宇宙と言うのか、何と言うか、どう表現するのか、私は分からんですけど。やはりそういう、人を超越したものの働きが、私はまあ、神さんだと。

（ナレーション）

人生最大の危機を乗り越え、改めて神様と出会い直した岩崎さん。今、生かされていることに感謝し、金光教の信心の良さを周りの人に伝えたいと強く願っています。そして、守り育てて来た会社が、これからも世の中のために役立ち続けるようにと、先を見据えた体制作りに取り組んでいるところです。

《信者さんのおはなし》

「おまかせ、おまかせ、神様におまかせ」

（ナレーション）

現在、名古屋の介護施設で働く田中隆史（たなかたかし）さん、58歳。認知症の方や、寝たきりの方、体の不自由な方も受け入れている施設です。この施設で働く前の田中さんは、長年、営業職に携わってこられたのですが、15年前から目の病気、緑内障を患い、50歳を目前に転職を余儀なくされました。緑内障は、徐々に視力が低下し、失明にも至るものです。田中さんは現在の視力について、「例えば、人と向き合っても、なんとなく年齢や性別が分かるくらいで、顔立ちまで見ようとすると、相当近寄らないと分からないんです」と言います。この緑内障による視力の低下が、前の職を離れざるを得なかった理由なのですが、今、施設でいろんな方をお世話する中で、自分が緑内障を患っているからこそ、気づけたことがあると言います。

（田中）

「できることは頑張ってやってもらう。その中で難しいことをちょっとお手伝いするのが介護の仕事である」というふうに教えてもらったんですね。だから、そうすると、やっぱり自分がハンディがある分、私よりも見にくい人もいますから、手を携えることもできるし、そういうところはちょっと生かされているのかなって

いうふうには感じます。それが信心に直結できているかは別としても。でも、やっぱり私は、この人たちとは今しか一緒にいないので、やっぱり精一杯に一緒に生きていきたいなと感じますね。

（ナレーション）

「緑内障で目が見えにくいことが、今の仕事に生かされている。そう気づいて、自分でもお役に立てるんだと思えるようになった」。田中さんはそう言います。こんなふうに言ってしまえるのには、10年前、田中さんの身に突然降りかかったある出来事が関わっているのかもしれません。

（田中）

生涯の最大の病気なんです。睾丸がんって言って精巣腫瘍ですけど、摘出手術を受けました。それがちょうど10年前、48歳になる年でした。まあそれも非常におかげだったのか、今になればってことでしょうけど、最初は小さい病院に行ったんですけど、「すぐ大きい病院に行きなさい」って言われて、紹介状を書いてもらって行ったら、「もう、今日すぐ手術します」と言われて。「はあ」とか思って。よく漫画で「ガーン」とかあるじゃないですか。そんな気も全然なくて、何だろうとか自分で思いながら。でもすぐ教会に電話させていただいて、「手術になりました」とお伝えしました。その時に妻にも連絡はしましたが、ちょっと距離が離れてた

ので、その間に全部、書類とか自分で書いて、段取りしました。それがお昼ぐらいでしたけども、夕方5時ぐらいだったかな、手術は。無事に終えさせていただきました。ここ10年、再発もありません。

（ナレーション）

田中さんが金光教を知ったのは、奥さんと出会ってからのことでした。お付き合いが始まり、奥さんの家族がお参りしている幅下（はばした）教会へ参拝するようになりました。田中さんは、「教会の先生や信者さんたちが、いつも親しくしてくれるし、居心地がいいな。信心の話もいいお話だな」と思っていました。しかし、心にピンときていたわけではありませんでした。そんな中、がんの診断を受け、思いもよらない手術を受けることになって初めて、教会で聞いたある信者さんの言葉が心に迫ってきたのです。

（田中）

実はその時に診断されて、「手術しますよ」と言われた時に、まずよぎった言葉があるんです、私の頭の中に。それが「おまかせ」っていう言葉なんです。それは、幅下にお参りするある信者さんが、ずっと口癖のようにおっしゃっていました。今思うと、「何でも神様にお任せしとけば大丈夫」と、そこまでを全部は言われなくて、ただ「おまかせ」とだけしか言われないんですけど。「おまかせ、おまかせ」って。それが、その時に一瞬、よぎったんですよ。は

っと思って。そうすると、なんかね、別に、怖いっていう気持ちも何もないし、「もうしょうがないじゃん、もうなってしまったし、任せるしかないじゃん。自分で何かできるわけでもないし」と思って。そこからすっともう別に普通に。はたからすると、「なんやこの人」って思われるくらいに冷静に。さっき言いましたように、もう入院の申し込みとか自分で書いてるぐらいなんで。普通だったらね、分かんないですけど、人によっちゃあ、ガタガタしてできないのか知らないですけど。なんかそのへんも、普通に教会にもお届けできたし、妻に電話しても、「まあそうなんだわ」みたいに、そんなぐらいの言い方ができたのも、それも一つのおかげでもあったのかな。自分の中ではとても、今でもその言葉は自分の中では大事にさせていただいてます。

（ナレーション）

突然のがんの宣告、そして、当日の手術。目まぐるしく起こってくる思いもよらない出来事にも、田中さんは自分を失わず落ち着いていられたと言います。そこには、「おまかせ」という言葉の支えがありました。「苦難の時にすがれるものがある安心を知った、また、困った時の神頼みとは違った神様への向かい方ができたのかな」。田中さんはこの経験をそう振り返ります。

この人生最大の一日で神様を感じた経験は、いつも田中さんを力づけていることでしょう。

50歳を前にしての転職については、「なかなかつらいことも多いですよ」とこぼされます。それでも、介護の仕事に就くことになったのも、神様の導きだと感じています。

田中さんは今、共に寄り添い歩む介護に励んでいます。そして、田中さんのその目は、精一杯生きる人へ向けられています。

金光教本部　ラジオ放送係

住 所　〒719-0111
岡山県浅口市金光町大谷３２０

電 話　０８６５-４２-６４５３

FAX　０８６５-４２-２１１４

メール　w-master@konkokyo.or.jp

KONKOKYO

朝日放送　日曜日　あさ5時40分

放送センターHP
「こころで聴く
おはなし」

「こころで
聴くおはなし
Podcast」

放送後の音声はWebサイトやPodcastで聴くことができます。